

## 柴田雄次「名大理学部第一回入学生への訓辞」（1942年）



柴田雄次（化学、1882～1980）

去る三月二十六日の官報で初めて名古屋帝国大学理学部の官制が発布せられ、この施行が四月一日よりとのことで、四月一日にわが理学部は合法的に成立したことはお互いに慶賀に堪えぬ次第である。

しかし学部というものが教官学生の有機体〔註：universityの原義《*universitas societas magistrorum discipulorumque*》（教師と学生の組合）をふまえていると思われる〕として活動するものである以上、名古屋帝国大学理学部の歴史の第一頁は今日ただいまから開かれる。吾人はじつにこの光栄ある歴史的事実の登場者である以上、その責任はじつに重大である。いかなる書物でもまず第一頁の落筆というものは極めて慎重を要するもので、この冒頭がだれていたらばこの一冊は誰も読む人はない。

諸君は幼稚園、小学、中学、高等学校を経てただいまこの新しき大学において新しき大学教育を受けんとする。従来諸君が経てきた教育は国民的義務教育および大学への準備教育であるが、要するに一つの集団教育である。小中高等の各学校には文部省から規程せられた教科要目が存在し、先生はこの範囲内で教育を施している。集団的事象の一般性として、上には上記の規程があり、下には集団中の能力低劣者〔ママ〕というものがあり、これを置き去りにせぬよう歩調を調節する必要がある。例えば艦隊運動がごときもので、そのうちの最低速力のものがこの運動に影響を及ぼすことは免れがたい。したがって、高能力者はあるいは焦燥を感じる場合があるかもしれないが、とにかくクラスとして一定の程度の規定内の進歩をはかるほか仕方がないのである。

大学教育は全然これと異なるのである。特に理学部のごとく科学教育においては、言いようによっては一つの寺子屋である。大学には文部省で定めた教科要目というようなものはない。教官等の当事者が定めた課程が文部省に届けてはあるが、内容を制限せられることはない。最高最新の学問が授けられ、教官学生がともども研鑽につとめるのである。力ある者は、相撲のぶつかり稽古のごとく三役にぶつかり、いくらでも自分の力をつけることができるが、怠ればたちまち■■から置き去りを食うのである。ぶつかり稽古でしばしば三役もたおれるかもしれない。三役をたおす若者が出てくるということは大学教育の最も望むところであり、また、かくのごとくでなければ学問の進歩はない。しかし学問の目的はどこにあるかといえ、もちろん真理の探究という大目的はあるにしても、その方法行動に国家を忘れたやり方があるとすれば、これは極力排撃しなければならない。かの有名なパスツールの言、「科学に国境なくも科学者に祖国あり」とは万古の能言である。

目下わが国は大東亜聖戦完遂に上下一億一体として邁進中である。わが日本国民に対する指導精神はこのほかにはないのである。これはあらゆる方面に携わる日本人に共通の指導精神で、科学に精進する者といえどもこれを逸脱して行動思索することはゆるされない。すなわち諸君は、炳乎たるこの大目的のもとに身心を鍛錬しつつ体当たりの勉強をなし、この不自由不足の中においてこれを克服しつつ進むということを覚悟しなければならない。これはまた無上の精神修養でもある。万事お膳立てのできた古き伝統中の学校に学べば若干の安易はあろうが、この不自由のうちにおいて処女地に鋏を入れる喜びはまた、諸君が■■有する誇りと喜びであらねばならぬ。

すなわちこの新しく生まれた名古屋帝国大学理学部が、巍然たる大学に成長し鬱然たる学林として世界学界敬■■的的となるか、平凡なる一つの学校となるかは、これ第一回の学生たる諸君もその責任を大いに分担しなければならない。この矜持を心に持って奮励一層ならんことを望む次第である。